しあわせ

4　月　号

真理はただひとつであって
第二のものは存在しない
それを知るものは
争うことがない
（スッタニパータ）

「手を合わす母」

入園、入学、入社、コロナの先が見えない中、見切り発車状態での新年度を迎えた。世界中がコロナで疲弊しきったところにロシアのウクライナ侵攻。世界の懸念をよそに核攻撃をちらつかせ、世界に脅しをかけてのプーチン大統領の顔が鬼に見える。

鬼は、いつの時代にもそしてどこにでもいる。いや、自分の似顔絵に角を描かせたのは妙好人浅原才一さん。才一さんにとって鬼は外にいるのでなく、自分自身の中にいた。それに気づかせていただいたのがお聴聞だった。

争いは善と悪の戦いではない。鬼と鬼の戦いだ。日本もかつて、鬼畜米英といって戦った。しかし鬼や畜生は米英に限ったことではなかった。お面をかぶっていては自分の姿が見えない。

お面が取れてはじめて鬼の姿に気付く。プーチンさんに本当の自分の顔が見える鏡をとどけることはできないだろうか。

法座案内

＜花まつり＞
四月　十日（日）
午後一時～三時まで

＜春季彼岸法要＞
四月　十五日（金）　昼席・夜席
十六日（土）　昼席
講師　藤末光紹師
（神戸市　高福寺住職）

＜法味の会＞
四月　二十二日（金）午前十時～
お話　自坊住職

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目二十五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二－四八二三

真理はただひとつであって、第二のものは存在しない。それを知るものは、争うことがない。

（スッタニパータ）

お釈迦さまは、歴史上でただ一人、目覚めた人（ブッダ）と呼ばれた人でした。では、お釈迦さまが目覚められた真理はどのような真理だったのでしょうか。今回ご紹介することばは、古いお経典に伝えられているお釈迦さまの教えです。真理はただひとつであり、時代が変わっても、国が変わっても、変わることはない。二つめの真理というものはないとお釈迦さまは説かれています。これは「真理」ということばの説明であり、何となく意味もわかります。ただ問題はそのあとです。

「それ（真理）を知るものは、争うことがない」

たしかにお釈迦さまは誰とも争うことがなく、またいかなる人も、お釈迦さまを傷つけることはできなかったといわれますが、これは、なにを意味しているのでしょうか。

先日、子どもたちをお風呂に入れていると、いつものように、七才の長女と三才の次女が口げんかをはじめました。ことの発端は、湯ぶねのなかで次女が長女をまたいだ、それだけなのですが、幼くて口では太刀打ちできない次女はいらいらをつのらせ、ついにペチッと手をあげてしまいました。さすがに黙認できず「あ！ひとちゃん、今のはダメだよね！」と声をかけたところ、次女は大きな声で泣き出してしまいました。もちろんペチンされた長女も泣いているので、お風呂のなかは大音量です。なだめようと声をかけてもまったく聞く耳をもたないので、だんだんこちらも声が大きくなって途方にくれるなか、ふと今回のことばを思いあわせました。それ（真理）を知るものは、争うことがない。それは言い換えると、争うことのあるかぎり、わたしは何もわかっていない、ということですね。

人類は、有史以来、争いをつづけてきました。そして今もまさに世界的な危機に直面しており、日本に住むわたしたちも、万が一、核戦争に発展するならば、今日が最後の日となる可能性はゼロではありません。なぜ、わたしたちは争いつづけているのでしょうか。どこまで、傷つけあうのでしょうか。わたしたちは自分は正しい、自分こそが正義だと考えて、今日も誰かを傷つけているのでしょう。しかし、たとえどれほど立派な理屈で正当化していても、なお、争うということのあるかぎり、わたしは何もわかってない。そうお釈迦さまは仰っているのでしょう。もちろん、わたしたちには、お釈迦さまがどのような真理に目覚められたかはわかりません。けれども、お釈迦さまの言葉のなかに、争いを続けるわが身の愚かさをうなづかせていただくことは出来るでしょう。そこからはじまる歩み方も、あるのではないでしょうか。

ふと気づくと、湯ぶねのなかでは、やっとつかまり立ちができるようになった長男が、うすい眉毛を「ハ」の字にして、心配そうに姉たちを見つめていました。人間は、わずか十か月の赤ちゃんでも、他者のいたみを想像するこころをもっているのですね。お釈迦さまはこうも仰っています。

「己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ。」

それ（真理）を知らないわたしたちは、どこまでも、争いつづけるほかないのかもしれません。けれども、その愚かさをうなづかせていただくならば、わが身のありさまを恥ずかしいと感じうるならば、そこに新しい生き方も生まれるのではないでしょうか。人間はわずか十ヵ月の経験しかない赤ちゃんですら、自らにおきかえて、他者の悲しみを想像する心をもっているのですから。

南無阿弥陀仏